

大学におけるサブカルチャー

Subculture in university education

- ノボルの場合 -

な か は ら か ぜ

第1章

「専門学校？」

ノボルはそれも選択肢なのかなあ……クラスメイトのレイトクの言葉に妙に納得してその言葉を繰り返した。

ノボルは高校3年生、当然これからの進路について大いに悩むところではあるが、実は親にも言っていない夢があった。たまたま帰り道にクラスメイトで親友のレイトクと、進路のことで話していると、レイトクがしっかりとした進路を考えていることに少し驚いた。レイトクが続けた。

「オレは専門に行ってデザイナーになりたいんだ。オレの姉ちゃんデザイナー目指してたらどう？」

ノボルはレイトクの姉が数年前に病気で亡くなったことを知っていた。

「姉ちゃんの部屋がそのままにされてるんだけど、デザインの勉強をしていた、そのころのままになってるんだよ。その部屋に入るとな、なんか姉ちゃんの描いていたイラストとかいろいろあってさ」

学校帰りの通学路は河川敷を歩いて、この時期だと遠くにコンビナートをシルエットにしなが、大きな夕日が沈んで行く。レイトクの顔も心なしか赤く火照っているように夕日を浴びていた。

レイトクがポツリと言った。

「オレもやってみたいな、姉ちゃんの好きだったこと……」

「オレたちってさ、そう言えば小学校の頃から漫画ばっかり描いてたよな」

ノボルが笑いながら答えた。

「ノボルなんかさ、教科書にストーリー漫画描いて、親呼び出し騒ぎになってさ、大騒ぎだったな、あはは」

「あれは理科の教科書全ページ、漫画でコンプリートしたからな」

「うん、漫画はノボルの方がはるかにうまかったな、あの頃から」

レイトクがそう言うと、遠く鉄橋をゆっくりと渡って行く列車が見えた。それを見てノボルがつぶやいた。

「あのぎゅうぎゅう詰めの通勤列車で毎日通う仕事は嫌だなあ」

夕日はすっかり海に沈んでしまい、あたりは冷たい空気にかわりはじめていた。逢魔時はなんとなく心が不安になる風景を持っている。うっすらとしたはっきりとしない薄暮の風景がそうさせるのであろう。ノボルも自分のやりたいことがわかっているのにもかかわらず、それをどうデッサンしていいのかわからない、そんな逢魔時にいる気がしていた。

「ノボルはどうするんだ？」

こんどはレイトクが聞き返してきた。

ノボルの夢は、そう漫画家になることだった。子どもの頃から叱られても叱られても描くことをやめなかった、漫画本を捨てられたこともあった。それでも、やめることが出来なかったくらい、大好きな漫画を描きたかった。しかし、そんな夢を語ることが気恥ずかしく思うこともあった。

「親はさあ、会社員になれって言うんだよな」

「サラリーマンってことか？」

即座にレイトクが聞き返してきた。

「安定した仕事につけということさ」

レイトクが笑って言った。

「ははっ、ノボルらしくないなあ、どうみてもサラリーマンってタイプじゃないだろう」

「コンビニ寄って行くか？」

ノボルがそう誘う前に、レイトクはすでに走り始めていた。

「腹減ったあー」

日はすっかり沈んで、沢山の屋根の向こうに突き抜けたようにコンビニの眩しい看板がいつそう目立って見えた。

第2章

「進路のことは先生になんて話してるんだ？」

まずは父親が口を切った。

父親は市内の工場で働いている職人である。といっても新幹線の車体を造る仕事である。若い頃は三交代制でがむしゃらに働いていたが、今は中堅どころとなり指導者としての役割もあり、昼間の勤務となっている。しかし、納期が迫ってくると夜遅くなることもあった。父親の携わった新幹線は国内だけではなく世界中で走っている。先日、イギリス向けの車両が完成したばかりであった。

「まだなにも……」

漫画家になりたいとは言えなかった。

「父さんにみたいに職人になるより、ちゃんとした大学に進学して会社員にならないとだめだぞ」

「レイトクは専門に行ってデザイナーになるらしいよ」

父親はビールのコップを持ったまま、少しだけ呆れた顔をしながらノボルを見た。

「デザイナーって……絵描きか？」

「うん、みたいなものかなあ」

ビールを飲み干すと

「そんなもん仕事になるんか？かわつとるなあの子も」

父親はノボルの方へ向き直すと続けた。

「父さんのような若い頃に苦労して働いて、油や鉄粉まみれになって、家に帰ったらなにも出来んくらいくたくたになって、ノボルにはそんな仕事についてほしくはないんだ」

父親はノボルの返事も待たずにそう言うと、再びテレビのカーブ戦へと顔を戻した。

「もうすぐ三者面談があるわよね。その時までに進路考えておきなさいよ」

母親がノボルがおかわりで差し出した茶碗を受けとりながら目配せをした。

「あれでも父さん、本気で心配してるのよ。ノボルをオレのような職人にさせたくない、ってね」

笑いながら母親がそうつけ加えた。

自分の部屋に戻って、ノボルは机の引き出しにそっと隠していた用紙の束を出した。それには線が引かれ、絵も描かれていた。漫画原稿である。ノボルはそれに丹念にペンを入れ始めた。この漫画原稿を雑誌社の新人賞に応募するつもりなのである。24ページの中編ではあるが、しかしノボルはこの作品に自信があるわけではなかった。ストーリー漫画を本格的に描くのは生まれて初めてだからだ。でも、なにかアクションを起こしたかった！ 自分の夢をカタチにしてみたかったのだ。

「もうすぐ完成だ！ これが入選したらなあ……すぐにでもプロ漫画家になるのになあ」

第3章

その日は朝から雨が降っていて、進路支援室の教室は天井の明かりがあるとはいえ、どことなく暗く沈んで見えた。それは今からノボルが説明しないといけない進路について、ノボル自身の重苦しい心境を投影しているかのようでもあった。

「だいたいのところお母さまの説明によると、ご両親としては4年制の大学に進学させたいということですね」

母親はうなずいて答えた。

「父親が公務員か、一般の企業への就職を望んでおります」

「ほとんどの生徒たちや保護者の方々が、同じように言われます。それでいいんかノボル？」

先生はノボルの方を向き直って、確認するように尋ねた。ノボルは先ほどから、ずっと下を向いたままである。もちろん、両親が勧める進路が嫌なわけではない、レイトクのようなやつの方がむしろ少ないわけで、多くの友達が、将来に関して堅実確実な進路を望んでいるのだ。

「ほとんどの……同じように言われます」

先生のこの言葉が妙に引っかかって仕方なかった。

やっとノボルが口を開いた。

「どうしてみんなと同じでないといけないんでしょうか？」

先生も母親もノボルの顔を見た。とっさに二人とも言葉が出なかったのだ。そのくらいノボルの声は思い詰めた響きを持っていた。

「ボクは漫画家になりたい……」

「えっ、ノボル、今なんて言ったの？」

「ふざけちゃだめだろ、こんな時に」

母親も先生もにわかには信じられないといったリアクションだった。

「ふざけてなんかいません。ボクは漫画家になりたいんです！」

言うまでには、言えるかどうかまったく勇気がなかった。しかし、一言口を切った途端、これまで我慢していた自分の想いが、堰を切ったように吹きこぼれてきた。

「ボクは小学生の時から漫画が大好きで、いろんな漫画を読んでいるうちに、ボクもこんな作品が描けたらいいな、って思い出して。でも、なかなか読むのと描くのはぜんぜん違って、友だちに見せても笑われるばかりで」

先生が口をはさんだ。

「じゃあどうして今になってまだ漫画家になりたいなんて？」

「中2の夏休みに、ある経験をして、それを思い出すとボクはやっぱり漫画やりたい！ って、強く思うようになって……」

先生は母親に確かめるように言った。

「お母さんをご存知でしたか？」

「い、いえ。わたしも初めて聞きました」

先生は続けた。

「しかし上手に描けんかったんだろ。まずは進学が先じゃないのか」

そんなことはノボルにだってわかってる。自分がまだまだ漫画を描くことに未熟なことは、ノボル自身がいちばん良くわかっているのだ。でも、吹きこぼれ
そんなこの想いが中途半端な自分の中の流行ではないことは、こうして自分の夢を語ってる時の鳥肌の立つような興奮が物語っている。

「もう一度家でよく相談してみなさい」

そう先生は最後につけ加えた。

第4章

「専門をやめる？」

いつもの河川敷を帰りながらレイトクが、またまた爆弾発言である。

「2年間の専門の勉強で実力がつくかどうか、オレ自信がなくなってさ。オレたちって子どもの頃から漫画ばかり描いてきたけど、美術とか、デザインとか、ちゃんとやってきたわけじゃないし」

そう言ってレイトクが少し哀しげに笑った。

「じゃあ、どうするんだよ、これから」

「うん、浪人してでも美大目指すんだ！ 姉ちゃんが目指してたこと、本気でやりたいって思うんだ」

レイトクは屈託なく自分の将来を語った。ノボルは聞いてみた。

「親は？ 大丈夫なのか？」

「姉ちゃんの夢を継ぐんだぜ、当たり前だろ。オレ、姉ちゃんの部屋を使うことにしたんだ。親は最初は嫌がってたけど、そこだと頑張れるんだよ、なんか姉ちゃんが背中押してくれてるみたいで」

ノボルは正直、羨ましいと思った。自分も爆弾宣言したばかりだ。その後、何度か父親と話しはしたが、会社員になれ！ 職人みたいなことはやめろ！ の一点張りなのである。職人のどこが悪いと言うんだ、漫画家は素晴らしい技術職じゃないか！ 職人魂がそのまま人間になったような父親がなぜそんな風に言うのか、ノボルは少し悲しかった。

「それはね、ちゃんと安定した仕事に就いて欲しいからなのよ」

ある時、母親がそう言ったのを思い出した。

「父さんだって安定した仕事じゃないの？」

「若い時に身体壊して、何ヶ月も療養したことがあったんだって、職場に復帰した時に担当してた作業工程に別の人がいて、今まで習得してきた技術がまったく役に立たない場所に回されたらしいの。ショックだったみたいよ、その当時のお父さん」

鉄橋に今日もシルエットを残しながら、2両編成の列車が走っていった。

「どうした？ ノボル」

「あ、ごめん。オレ、今日、コンビニなしで帰るよ」

そう言うと、眩しい夕日の中に、呆気にとられているレイトクを残したまま、ノボルは家へと急いだ。今日、父親を説得出来なければ、もう時間がない！ この前、新人賞に投稿した漫画の結果を知らせるメールが2、3日うちにはくるはずだ。それまでに、ちゃんと話をつけなければ。今、聞いたばかりのレイトクの言葉がノボルを勇気づけていた。決めるのは自分なんだ。最後に決めるのは親じゃない、だって自分の人生なんだから。

第5章

「漫画家なんて、売れたらいいが、そんな人間なんてひと握りだろ」

父親の答えはいつも同じだった。

「会社員が嫌いだって言ってるわけじゃないんだ。もっとやりたいことがあるんだよ」

「漫画を描くことが、か？」

父親は読んでいる夕刊から目を離さず、半ばもうよせというニュアンスで言った。

「いいか、ちゃんと仕事に就いて、働きながらも漫画なんて、いくらでも描けるだろ。だったら大学に行って、就活をしっかりとやって、一般企業に……」

ノボルは父親が話し終わるのを待たずに答えた。

「だから、芸術大学か、美術大学に行きたい！ あのレイトクだって……」

今度は父親が言葉を遮った。

「なにになる芸大なんかに行って！ いいかノボル、所詮絵描きになって卒業しても、絵を描いて生活できるなんて夢の夢だ。万が一、作家になれたとしても何十年も描き続けてやっと認められる作家になれると聞いたぞ。レイトクの家とうちとは違うんだ」

そして最後に必ずこうつけ加えた。

「いいかノボル。父さんみたいに学がなくて、技術だけで仕事をしていると、怪我や病気であつと言う間にお払い箱だ。お前にはそうあつて欲しくないんだ」

ノボルはなぜか悔しかった。

「父さん、中2の時にね、学校で社会見学のために、新幹線の工場を見学したんだ。父さんの工場だよ」

「そんなことあったかなあ」

父親は覚えていないようだった。

「本当はね、その時すごく嫌だったんだ。父さんが汚い作業服で新幹線造つてのを、みんなに見られるのが」

父親はほらみろ、という顔で母親を見た。

「その時ね、レイトクが、ノボルのお父さんじゃん！ なんて言うからさ、みんなが父さんの方を見たんだよ」

「なんだ、そんな思いをしたのなら、ノボルだってスーツにビジネスカバンの颯爽としたサラリーマンの方がましなことくらいわかってるんじゃないか」

そう言うと、夕刊をテーブルに放り出したまま、お風呂に行く父親を呼び止めるようにノボルは言った。

「カッコいいじゃん！ そう言ったんだよ父さん。みんな、レイトクも、そう言ったんだよ。カッコいいって！」

父親も母親も、ノボルを見たままだった。

「ボク、絶対笑われる、って思ってたから驚いて。なんかどうしていいか分からなくて」

「みんななんて言ったんだ」

今度は父親が尋ねた。

「ノボルの父さん新幹線造ってるのか！ ボクらが乗ってるあれだよな。すごいなあ、学校の教室の窓から見える新幹線だよな」

「コンビナートを背景に走ってるのカッコいいよな！」

「新幹線の運転手、夢なんだよなあ。ということは、将来ノボルの父さんが造った新幹線をオレが運転するわけだ！」

ノボルは続けた。

「みんなそう言ってくれたんだ。まるで魔法使いが夢をつくってるみたいに、父さんのことを」

「ボクは父さんのように新幹線は造れないけど、子どもの頃から描いてる漫画で、みんなに夢を届けたいんだ！ だから、絶対に漫画家になりたいんだ」

父親はしばらく考えていたが……。

「漫画家になれなかったら、どうするんだ。4年間も絵を勉強して、それこそ無駄じゃないのか？ ダメだダメだ、そんなあてにもならんことは！」

第6章

朝から空が突き抜けるように高く、快晴であった。珍しく父親がキャッチボールをやろうとノボルを誘った。近くの緑地公園へ母親もついてきた。何年ぶりだろうか、家族で公園に来るなんて。

野球少年でもないノボルにとっては、キャッチボールなんて少しも面白い遊びとは思えなかった。時間があれば少しでも絵を描くことがしたかった、インドアな子どもだったからだ。それでも、小学生の頃は父親と休みの時にはグラブを交えた思い出はあった。その頃の父親は三交代制だったから、休みの昼間に少しでも息子と遊んでやろうという思いがあったのだろう。その頃のノボルはそのような父親の心の中はのことは分からないから、ただただ面倒くさかった。

その父親との6年振りのキャッチボールだったが、数十球投げて音を上げたのは父親のほうであった。

「ノボル強くなったなあ……」

父親がつぶやいたが、弱くなったのが父親の方だと感じていた。まるで最初から球威がなかった。それに元来、運動音痴のノボルには球威のある玉なんか投げられない。

「ほら」

母親が水筒から冷たいお茶をふたりに渡した。父親はそのコップを受け取ると、ごくごくとお茶を飲み干した。

「漫画を描くのは、そんなに面白いのか？」

父親の言葉にノボルはうなずいてみせた。

「あの頃、父さんと昔キャッチボールしてたその頃からか？」

ノボルは再びうなずいた。

「父さんはな、すぐにでも試験か資格検定みたいなものがあって、それに受かれば明日からでも漫画家として仕事に就けるのなら、それを頑張ればいいと思う」

「それがあればいいわね、ほんとに」

母親が笑った。

「この前話したように、芸大卒業しても就職がなければどうして食べて行くんだ？」

ノボルには父親がそのように心配するのわかっている。

「アルバイトしながらでも、漫画家目指すよ」

父親は少しあきれた顔で言い返した。

「ノボル、父さん達はアルバイトさせるために、高い授業料払ってお前を4年制の大学に行かせるんじゃないぞ」

ノボルはこの父親の言うことも、痛いほどわかっている。

漫画家になりたい、今すぐにでもなりたいけど、まだ実力がともなっていないことはノボル自身がよく知っている。普通の大学に入学して、空いた時間に漫画を独学で勉強しながら漫画家を目指す！ それもひとつの方法だけど、今の実力ではだめだ、誰かにちゃんと絵を描くことを教わりたい。大学生活と、やがて就職してからの自分にそんな余裕の時間がつくれるだろうか？

レイトクは芸大を目指している。デザイナーはしっかりと基本から発想とセンスと、それに技術を学ばなければならない世界だ。レイトクを羨ましいと思う。

仮にノボルが芸大に行くことが許されたとしても、絵画や漫画の世界では、学歴はほぼ関係ないと言っても良い。新人賞を取るなりして実力でデビューするしかないのである。父親が言うように、漫画家になる試験などない。残されているのは、進学せずに高卒で就職をして、仕事しながら漫画家を目指す。漫画家になるには、少しでも若い柔軟な頭を持っている年齢でデビューするのが理想的だと、漫画編集者も言う。どちらにしろ「なにか」と同時進行で、漫画の勉強とデビューに向けての投稿をひたすら続けなければならない。世間にはニートになって、家に籠もって漫画を描く若者もいるようだが、今のノボルにはむしろそれこそ現実的ではない。この四面楚歌とも言える状況に、いつの間にかノボルも父親も口を閉ざしてしまった。身体を動かせば、少しは良い打開策が見つかるかもしれないとキャッチボールに誘った父親も、クラブやボールを片付けはじめていた。

その時、母親がすつとんきょうな声をあげた。

ノボルも父親も、思わず母親の顔を見た！

母親が今思い出した、そんな表情で目を大きくして話し始めた。

第7章

「母さんね、大学のエクステンションにヨガ習いに行ってるじゃない。その帰りにね、漫画やイラストがたくさん展示してある教室の前を通るのよ」

「大学の教室に漫画が？」

父親が不思議そうに尋ねた。母親は続けた。

「教室というより、そうね建物、校舎そのものが漫画やイラストで飾ってあるのよ」

「漫画クラブ、とかサークルの教室じゃないのか？」

父親はまだ納得がいかない様子だった。

「ちょうどね、その建物から出てきた学生たちがいたから、聞いてみたのよ。するとね、なんとその学生たち、ひとは漫画家目指して勉強していて、もうひとはアニメーターになるためにアニメーションの勉強をしてるんだ、って言うじゃない！驚いてしまって」

父親は笑いながら、そんなことがあるものかという顔で。

「あそこの大学だろう。確か、経済学部と福祉情報学部しかないはずだぞ。うちの工場にも卒業生がいるが、漫画描いてるなんて言ってなかったぞ」

「後から出てきた女の子は映画を作ってるって。本当の映画監督さんが教えていて、実際のプロの映画制作に授業として参加してるって話してたわ」

ノボルが母親のその言葉を聞いて、思い出したように話を取り上げた。

「レイトクが言ってたのはそのことかもしれない！ 残念だけどデザインのコースはないけど、デザイナーの先生もいるし勉強は出来るって、遠くの芸大を志望校にしてたけど、サブカルチャーを教えてくれる大学が自分の街にあるんだったら、そこも狙い目だ！ って」

こんどは母親が言葉を取った。

「なんていったっけ？ 難しい名前前のコースだったわ」

「レイトクはこう言ってた、知財開発コース！」

母親は思い出したように。

「そうそう、知財コース、知財コース！」

なんとなく置き去りにされている感じでいた父親が聞いた。

「なんだ？ その、ち・ざ・いコース、というのは？」

次はノボルの番だった。サブカルチャーに強いノボルであったが、実はそのコースについて調べてはいなかった。レイトクの言うことだからなにか冗談ばくも思えたからだ、その時は。なによりも自分の街に漫画やアニメーションを教えてくれる大学があるなんて想像もできなかったからである。あったとしても実習はなく、歴史や理論といった講義だけで、もしかすると確かに父親の言うサークルみたいなものなのかも思っていた。しかし、知財という言葉についてはノボルは、多少知っていて、知識もあった。

「知的財産のことだよ父さん。つまり、ボクらの頭の中にある財産のことだよ」

「父さんの頭の中にはお金なんかないぞ」

ノボルは違う、というように頭を振った。

「父さんが新幹線を造るときに使う、頭の中にある知識や経験は知的財産というんだよ。だって、父さんだけのものだろ。だから指導もできるし、お金の財産と違ってそれを盗むことはできないだろ」

海に近いこの緑地では、時間によって風が変わる。海から陸へと吹いていた風はやがて、陸から海へと帰って行く。その時に緑地のたくさんの木々はいつせいにざわめくのである。それを合図にねぐらへ帰るカラスたちも一斉に飛び立つ。

「父さんから見れば、漫画やアニメーションって子どもの遊びみたいに見えるかも知れないけど。今では日本を代表する立派な産業なんだよ」

ノボルは続けた。

「この前父さんが造った新幹線はどこに行ったの？」

「イギリスだ」

父親は少し自慢げに言った。

「漫画も一緒なんだ。日本のサブカルチャーは鉄鋼業に次ぐ産業として、外国ですごく売れてるんだよ」

「ああ、それは父さんもいつか新聞かテレビのニュースで聞いたことがあるよ」
母親が付け加えた。

「その時の学生さんもね、ボクたちは漫画を描いてるけど、経済の立場からの見方からも漫画やアニメーションを勉強してるんだって。だから、芸大とは違って経済の授業も多いらしいの、そう言ってたわ」

父親は不思議そうに尋ねた。

「経済の大学で漫画を？」

「学生たちの説明によれば、サブカルチャーを勉強するってことは、世界を見るってことでもあるみたいよ。世界の経済とも直接繋がってるから、大学でサブカルチャーを勉強するんじゃないのかしら」

母親はもうひとつ思い出した、といったように軽く手を叩くと。

「だって作家になった卒業生も当然いるけど、一般企業へ就職する学生たちも多くいて、企業の中でも柔軟な発想力やプレゼンテーション能力が高いから重宝がられてるそうよ」

今度はノボルがつけ加えた。

「知的財産だよ、父さん。ボクはそれを、その財産をいっぱい勉強して、知的財産のお金持ちになりたいんだ！」

「よく分からんから、とりあえず、じゃあその大学のパンフレットかなにかもらってこい」

「うん！」

ノボルは元気に返事をする、ボールなどを洗いに水道へと走った。水道を出しているノボルの姿がシルエットに見えるくらい夕日は低くなりつつあった。

「たまたま通りかかった校舎、って言ったけどそうじゃないだろう？」

父親は笑いながら母親を見た。

「ばれちゃった？ そう前から気になってたのよ、ノボルが漫画家になりたいと言う前からね。あの子のことはよくわかるのよ、あなたに似てストレートだから。それに、あなたのDNAなのよ。物づくりが大好きなのは。本当は大好きなのよね新幹線造るの。ノボルも同じ漫画描くのが大好き。蛙の子は蛙ね」

それを聞いて、父親はあははと笑った。

「母親はいつの時代でも息子の味方だな、ひょっとしてもうパンフレットも貰ってきてるんだろ」

母親は振り返りもせず、ぺろりと舌をだした。

翌日、ノボルとレイトクは新人賞の落選を悲しんでいた。

「1発目から入選はないだろうな、あはは」

レイトクは本気で笑った。でもレイトクにも、父さんにも、どんなに笑われても負けない、絶対に漫画家になる！ 次は一次審査くらいは通過する作品を描いてやる。ノボルはそう心の中で自分を奮い立たせた。知財開発コースに行くことができたとすれば、一緒に切磋琢磨するライバルたちもいるだろうし、我流ではなく本格的に最初からサブカルチャーを学ぶことができるはずだ。経済の学びの中では、コンテンツビジネスというらしい。

「どこからでもかかってこい！ コンテンツビジネス」

ノボルは自分の街にそれを学べる大学があったことを、神様に感謝したいくらいの気持ちであった。

「コンビニ行くぞ、ノボル」

先に行くレイトクが大きな声で呼んでいた。

おわり

(研究ノートではありますが、今回は物語としての形式で書かせて頂きました)